

有明高専における英語成績・TOEIC IPスコアの記録について

— 個人英語成績データベース構築の意義とその目的 —

山崎 英司

<令和8年1月13日受理>

The Record of the English Grades and TOEIC IP Scores in NITAC — The Significance and Objectives of Personal Database Construction —

YAMASAKI Eiji

This study demonstrates the importance of developing an English achievement portfolio that documents students' performance throughout their enrollment. Drawing on past initiatives and reflections on proficiency-based English Classes at National Institute of Technology Ariake College (NITAC), the paper outlines the process leading to the creation of an English achievement portfolio and discusses the significance of constructing a database of individual English performance records.

I はじめに

有明高専英語科ではこれまで、将来の英語学習カリキュラムの更新を検討する際、学年末に算出される各英語授業の成績の学年平均点や、春季・夏季の長期休暇明けに実施される課題試験の学年平均点、さらに冬休み明けに1～3年生を対象として実施されるTOEIC Bridgeテストおよび4年生を対象として実施されるTOEIC L&RテストといったIPテストの学年別またはコース別平均点を参照してきた。すなわち「学年」や「コース」といった集団単位の成績をもとに、それぞれの集団に最適な英語教育カリキュラムの設計が行われてきた。

しかし近年、有明高専では学生個人ごとの英語成績の差が拡大しつつある。表1に示すように、過去5年間にわたり1～3年生を対象として実施されてきた TOEIC Bridgeテストにおいて、各学年の標準偏差は2021年度に一度低下したものの、その後は再び拡大する傾向が見られる。また、いずれの年度においても低学年より高学年の方が標準偏差が大きくなる傾向が確認されており、英語の学習内容が中学レベルから高校レベルへと移行するにつれて、有明高専生の英語力の格差がよ

表1 2020～2024 TOEIC Bridge 標準偏差推移表

	2020	2021	2022	2023	2024
1年生	10.89	8.86	9.87	9.64	10.24
2年生	11.62	9.81	11.48	10.45	11.31
3年生	11.42	11.15	12.61	11.96	12.27
1～3年全体	11.41	9.96	11.66	11.23	11.31

り顕著になっていることがうかがえる。このようなミスマッチを解消するため、現在有明高専では2018年度より2つの英語カリキュラムを実施している。

1つ目は、1年次の「英語Ⅱ」における多読授業である。多読授業では、学生が自身の語彙力に応じて教材を選択し、英語力の伸長に合わせて教材のレベルを主体的に調整していく。このような授業形態は、単一の教材を用いる従来型の英語講義と比較して、さまざまなレベルの学生の英語学習に対するモチベーションを維持しやすく、結果として成績の標準偏差の拡大を抑制する効果が期待できる。

もう1つは、3年生の一部のクラスを対象として「英語コミュニケーションB」の授業で実施されている英語習熟度別授業である。1つのクラスを英語習熟度に応じて2～3グループに分割し、それぞれのレベルに応じて学習内容や指導アプローチを調整することで、より効果的な学習成果を得ることが可能となる。実際、過去数年にわたるTOEIC Bridgeテストの成績を比較した結果からも、一定の教育効果が示されている。

本報告の目的は、このような学生個人成績推移と各種英語カリキュラムの効果を把握するために必要なデータベース構築の必要性を提言するものである。

II TOEIC個人スコア推移表の構築

1. 従来の指導の振り返りと課題

しかし、これらの従来のアプローチのみでは、有明高専の全学生に対して効果的な英語学習を提供するには不十分であるという課題意識がある。まず、多読授

業は図書館閲覧室の占有や大量の多読図書の整備を必要とするため、現状では1年生のみを対象として実施するのが限界である。読書に集中できる十分な学習環境と、学生一人ひとりの英語力に応じた多様なレベルの教材を必要とする多読授業を、全学年へと恒常的に展開することは容易ではない。

加えて学生自身が「自分の英語力がどの水準にあるのか」を正確に自己認識することは、想定以上に困難である。「英語Ⅱ」を履修し終えた2年生以上の学生が、放課後に図書館で多読学習に再び取り組もうとしても、過去の英語評価を即座に確認できない場合、どのレベルの図書を選択すべきか判断できず、結果として自学を試みようとした学習意欲が低下してしまう。

一方、英語習熟度別授業についても、全学的な拡大には構造的な制約が存在する。3年生全コースにおいて英語習熟度別授業を実施するためには、指導教員数が著しく不足しており、現状では一部のコースに限定して実施せざるを得ない。英語習熟度別クラス編成に関しては、藤田らが「習熟度の分散が小さい方が、成績面および心理的側面の双方において良好な状態を示す¹⁾」と指摘している。習熟度の分散を抑制するためには、英語力が比較的均質な学生でグループを構成するか、あるいは習熟度別のグループ数を増やし、各グループ内の格差を縮小する必要がある。しかし近年標準偏差の拡大が顕著な有明高専のような教育環境においては、前者の手法を採ることは困難であり、必然的に後者の手法に依存せざるを得ない。その結果、指導教員の不足という制約のもとでは、英語習熟度別授業を小規模かつ限定的に継続する以外に有効な手立てがないのが現状である。

2. 高校生と高専生のメンタリティの違い

このような行き詰まり感の中で、学生の英語学習に対するモチベーション向上の方策を模索してきた。その過程で注目されたのが、有明高専生に見られる学習成果の捉え方の特徴である。有明高専では、少なからぬ学生が直近の定期試験や外部試験の結果に強い関心を示す一方で、これまでの成績の推移については比較関心が低い傾向が見受けられる。定期試験後に返却される得点には強く反応するものの、過去を含めた総合的な成績変化を振り返る学生は多くなく、その結果として学習への取り組みが短期的・場当たりのようになって見受けられる場合もある。

この傾向は、高専生にとって進級の可否、すなわち進級か原級留置かが極めて重要な意味を持つことと密接に関連していると考えられる。一般的な普通高校においては、大学進学や就職の成否は重要であるものの、

通常授業における単位取得の合格基準は比較的 low、進級そのものを不安要因として捉えている生徒は多くない。むしろ、高校卒業後を見据えた資格取得や模擬試験の受験などを通じて、長期的な視点から自身の学習状況や成績推移を把握している生徒が多い。

これに対して高専では、単位取得の合格基準が大学と同様に60点に設定されているため、学生は直近の定期試験の得点に一喜一憂しやすく、学習の継続による能力向上や長期的な成長よりも、各学年における進級の成否に関心が集中しやすいという特徴を有している。

3. TOEIC 個人スコア推移表の開発に至るまで

そこで私は、英語学習の積み重ねを可視化し、学生の英語学習に対するモチベーション向上を図ることを目的として、2024年度より TOEIC IP テストの個人スコアシート返却時に、図1に示すような過去の成績を遡って確認できる「個人スコア推移表」を併せて学生に返却する取り組みを開始した。

	学籍番号	クラス	出席番号	氏名	1年次Bridge
4743	50000	4G	43	有明 花子	56 (300)
	TOEICスコア	L	R	3年次Bridge	2年次Bridge
4743	410	255	155	62 (340)	61 (330)

※氏名・スコア等は全て架空 ()内はTOEIC L&R換算点

図1 TOEIC IPテスト 個人スコア推移表

本推移表は、日本国内で TOEIC テストを運営する国際ビジネスコミュニケーション協会（以下、IIBC）から電子データとして提供されるスコアロoster（成績一覧表）を基に作成したものである。具体的には、クラス番号と出席番号を組み合わせた呼び出し番号（図1左側に示す4桁の番号）を入力することで、学籍番号、所属学年、クラス、出席番号、氏名に加え、1～3年次に実施された TOEIC Bridge テストのスコアおよびその TOEIC L&R 換算点、さらに4年次に実施された TOEIC L&R テストの総合得点ならびにリスニング・リーディング各パートの得点を自動的に出力する Excel テンプレートとして構築した。有明高専では、学内で実施された過去17年分の TOEIC L&R IP テストおよび7年分の TOEIC Bridge IP テストのスコアロosterを保管しており、これらを参照することで学生の過去の IP テスト成績を調査することが可能である。しかし、学生の所属学年、クラス、出席番号は毎年度変更されるため、従来は特定の学生の成績を確認する際、氏名を手掛かりとして過去のスコアロosterを遡る必要があり、作業は煩雑かつ非効率であった。

この課題を解決するため、有明高専英語科では2023年度より、TOEIC IP テストにおいて任意に設定可能

な10桁の受験番号を活用し、所属学年、クラス、出席番号、学籍番号の4項目を同時に収集する運用へと移行した。通常の定期試験では記入を求められない学籍番号を収集項目に加えた理由は、学籍番号が入学から卒業まで不変であり、かつ他の学生と重複することのない唯一の識別情報であるためである。有明高専のように在籍者数が1,000人を超える教育機関では、同姓同名の学生が複数在籍する場合や、在学中に家庭の事情等により氏名が変更される事例も少なからず存在する。そのため、氏名よりも信頼性の高いタグデータ（学生個人を一意に特定するための参照値）として、学籍番号を採用することとした。また、有明高専では学生が日常的に使用する学内メールアドレスや学内PCへのログイン用アカウントIDに学籍番号が含まれている。そのため、多くの学生は自身の学籍番号を既に把握しており、受験番号としての利用に際しても混乱は生じにくい。この点において、学籍番号は学生にとって記憶しやすく、かつ成績管理を行う教員にとっても扱いやすい識別情報である。

マークシート記入要領 留意点 (2025年度)

1 団体名は【有明高専】と記入し、氏名とフリガナも記入して下さい

2 受験番号は10ケタとなっています。

1ケタ目には【学年】、2ケタ目には【クラス番号*】、3・4ケタには【出席番号】
5ケタ目には【0】を記入し、6～10ケタ目には【学籍番号】を記入します。

※クラス番号について

1・2年生はクラス番号をそのまま記入してください。2年生はコース番号を書かないように！
3～5年生は所属コースに応じて、以下のコース番号を記入してください。
E=1 C=2 L=3 M=4 I=5 A=6

<記入例>

1年 4組 創造工学科	32番 学籍番号	62056	→	【1432062056】
2年 1組 建築コース	13番 学籍番号	61812	→	【2113061812】
3年 エネルギーコース	9番 学籍番号	60208	→	【3109060208】
4年 環境生命コース	29番 学籍番号	59199	→	【4329059199】
5年 情報システムコース	49番 学籍番号	58074	→	【5549058074】
専1年 生産情報システム(M)	05番 旧学籍番号	57199	→	【6405057199】
専2年 応用物質工学(C)	20番 旧学籍番号	56074	→	【7220056074】

※専攻科生は本科時代の旧学籍番号(Gmailの「sXXXX@～」のXXXXの部分)

図2 マークシート記入要領 留意点

図2は、TOEIC IP テスト実施時に「受験のしおり」と併せて有明高専英語科が独自に配布している受験者データ記入用資料である。左側に所属学年、クラス番号、出席番号を配置し、間に空白用として「0」を1桁挿入した上で、右側に学籍番号を配置し、全体で10桁の受験番号を構成している。所属学年、クラス番号、出席番号を左側に配置しているのは、IIBCから返却される個人成績の印刷物が受験番号順に並べられており、学生への返却時には「学年・クラス・出席番号順」となる方が運用上望ましいためである。

4. 個人スコア推移表の作成方法とその意義

この受験番号が登録された TOEIC IP テストのスコアロースターが IIBC から返却された後、10桁の受験番号を基に、Excel の LEFT 関数および RIGHT 関数を用いて各要素を個別に抽出し、TOEIC IP テストデータを効率的にソート可能な形式へと一次加工を行う。学籍番号が抽出できれば、VLOOKUP 関数を用いることで、過去のスコアロースターから当該学生の TOEIC IP テスト成績を容易に参照することが可能となる。図1に示した個人成績推移表の作成においても、左側に配置された呼び出し番号(4桁)および学籍番号(5桁)は、いずれも受験番号から抽出された情報である。抽出された学籍番号をタグデータとして使い、過去の TOEIC Bridge スコアロースターをコピーした Excel の別シートから、当該学生の過去スコアを自動的に呼び出す仕組みを構築している。

日本国内における TOEIC テストの運営を担う IIBC では、公開テスト受験者に対してオンラインでのスコア確認サービスを提供している。一方で、特定の団体が個別に実施する IP テストについては、受験者個人がオンライン上で直接スコアを確認することは困難であり、その成績管理および返却方法は各実施団体に委ねられている。このような状況において、有明高専で導入した TOEIC IP テストの個人成績推移表は、単一回のテスト結果に一喜一憂しがちな高専生に対し、自身の英語力が継続的に向上しているかどうかを客観的に把握するための有効な指標となる。これは、学生が英語学習の積み重ねを意識する契機となり、結果として英語学習に対するモチベーションの維持・向上に寄与するものと考えられる。

III 個人英語成績データベースの構築に向けて

1. 英語総合ポートフォリオ作成の着想

このように、TOEIC IP テストのスコアロースターを基に作成した成績推移表の導入により、近年の有明高専生は自身の TOEIC IP テストのスコア推移を継続的に確認できるようになった。しかし今後は、TOEIC 一斉テストのスコアロースターのみならず、有明高専校内で毎年複数回実施されている希望者向け TOEIC IP テストのスコアロースターや、通常の英語授業における成績も統合し、入学時から卒業時までの英語関連授業および校内で受験したすべての TOEIC IP テストの結果を一元的に記録する「個人英語成績データベース」を構築することを現在検討している。これにより、入学後の英語成績を一目で把握できる、図3に示すような英語総合ポートフォリオの出力を可能とすることを目指している。

この英語総合ポートフォリオ作成の着想は、英語成

英語総合ポートフォリオ			学績番号： 60000		氏名： 有明 花子			
科目名	平学 均年	個人成績	TOEIC 一斉テスト 試験タイプ	平学 均年	個人成績	TOEIC 換算スコア	受験日	
1年	BACEテスト	225	250	TOEIC Bridge	54.1	55	(300)	20260108
	英語 I	79.1	75	TOEIC Bridge	60.1	50	(280)	20270107
	英語 II	85.5	80	TOEIC Bridge	68.8	44	(250)	20280108
	1年次 夏課題試験	82.7	70	TOEIC L&R	343	200		20290107
2年	2年次 春課題試験	84.7	72					
	英語 III	90.6	65					
	英語 IV	85.4	60					
	2年次 夏課題試験	70.9	40	TOEIC希望者向けテスト				
3年	3年次 春課題試験	76	59	TOEIC L&R		325		20290504
	英語コミュニケーションA	73.1	60	TOEIC L&R		410		20291111
	英語コミュニケーションB	74.8	61					
	3年次 夏課題試験	61.9	25					
4年	英語 A	93.6	80					
	英語 B	73.4	55					

図3 英語総合ポートフォリオ（暫定版） ※氏名・スコア等は全て架空

績が著しく低迷していた学生およびその保護者に対し、在学中の英語成績を振り返る資料を作成した際の経験に基づくものである。当該学生は、他教科と比較して英語のみ成績が際立って低い状況にあった。その要因を探るため、入学時以降の英語成績を時系列で整理したところ、入学当初は大きな問題が見られなかった成績が、学年の進行とともに徐々に低下し、4年次のTOEIC 一斉テストでは極めて低いスコアを記録していたことが明らかとなった。

このような成績の長期的推移は、各年度の学年末成績表のみを確認しては把握することが困難であった。この事実は、教員や保護者のみならず、学生本人にとっても十分に認識されていなかった可能性が高い。毎年の進級を最優先事項とする高専生特有の学習観が、過去の成績を振り返る機会を希薄にしていた一因であると考えられる。仮に2年次または3年次といった早期の段階で、このような成績低下の傾向を把握できていれば、学習方針の修正や適切な支援介入が可能であったと推察される。

IV まとめ

現在、有明高専では2年生の夏季休業期間にシンガポール研修を実施しており、主として低学年段階における英語学習へのモチベーション向上の機会となることを期待している。また国際交流室を中心に、多様な留

学プログラムの推進にも取り組んでいる。これらの取り組みは、学生の英語学習および英語コミュニケーションに対する動機付けを高めることを目的としているが、それらが英語習熟度の向上にどの程度寄与しているのかを検証する際、本研究で構築を検討している個人英語成績データベースは有効な分析基盤となると考えられる。さらに、留学プログラム参加者の選抜に際して申請者の英語総合ポートフォリオを参照することで、単一の試験結果に依存しない、より多角的な評価に基づいた適切な学生選抜が可能となる。

こうした英語総合ポートフォリオにより、現在有明高専英語科で実施している様々なカリキュラムの教育的意義を、受講学生に対して明確に示すことが可能となる。また過去から現在に至る学習の蓄積を容易に振り返ることができれば、学生自身も英語習熟度が着実に向上する実感を得ることができ、継続的な学習への強い動機付けとなることが期待できる。以上の理由から、個人英語成績データベースの構築および英語総合ポートフォリオの作成は、有明高専における英語教育の質的向上に向けた喫緊の課題であるといえる。

参考文献

- (1) 藤田邦彦, 新谷真由, 縣由衣子. (2024). “英語習熟度別クラス編成を再考する”. 文京学院大学経営論集, 34(1), 208.